



編集委員の10年間を振り返って

日本大学生物資源科学部獣医学科
獣医公衆衛生学研究室 教授
まる やま そう いち
丸 山 総 一
Soichi MARUYAMA

40年ほど前に私が大学の助手になりたてのころ、獣医公衆衛生学の実習で食中毒細菌の分離・同定法を学生達に教えていた。当時のモダンメディア誌は、各種食中毒細菌の分離・同定法をいち早く取り上げていたので、細菌学を始めたばかりの私にとって大変お世話になった雑誌である。時が過ぎ、10年前に本誌の編集委員のお話が来た際は、大変光栄に思ったが、過去の編集委員の先生方を見ると、私の恩師でもある勝部 泰次先生（第3代編集委員）をはじめ、そうそうたるメンバーが名を連ねていた。浅学の私に果たして務まるのかという一抹の不安もあった。7名の編集委員のうち、私以外は全て医学系の先生方であったため、私は獣医学の立場から、主に食品衛生、環境衛生、人獣共通感染症に関するコンテンツを担当させていただいた。私は編集委員としての役割を果たすべく、自分の関連分野で何かシリーズを立ち上げてみたいと思った。これまで本誌では、「病原微生物（悪玉）」を多く取り上げてきたが、この際「有用微生物（善玉）」も取り上げてみても面白いのではないかと思い、「身近で活

躍する有用微生物」を立ち上げた。実際に有用微生物を調べてみると、薬（抗生物質）、味噌、醤油、納豆、チーズ、酒類等を造る際に使われている微生物ばかりでなく、電気を作る微生物やプラスチックや石油を分解する微生物など、われわれの周辺には実にたくさんの有用微生物が存在し、活用されていることが驚きであった。現在は多様性の時代ともいわれているので、本誌の中で悪玉だけでなく善玉微生物を取り上げることができたのは少し時代を先取りした感もあり、内心嬉しかった。

本誌の「全国衛生研究所見聞記」のシリーズでは、2015年に川崎市健康安全研究所を訪問させていただいたことも、編集委員としての懐かしい思い出である。所長の岡部信彦先生とは、研究会等々とお世話になっている旧知の間柄で、また、私が当研究所の外部評価委員であったこともあり訪問を快くお引き受けいただいた。新設された所内の案内をしていただいた後に所員の皆さんとデッキで写真を撮った際、対岸の羽田空港から夕日の中を多くの飛行機が離着陸していたのがとても印象的であった（写真）。



写真 2015年に訪問した川崎市健康安全研究所のデッキで職員の皆さんと。

コロナ禍でこのシリーズが中断してしまったが、今回、4年ぶりに静岡県環境衛生科学研究所訪問の記事を皮切りに再開されるとのことである。今後も本シリーズが続いていくことを期待したい。

世界に目を向けてみると、急激な人口増加、地球温暖化、高齢化、ボーダーレス化に伴ってさまざまな新興・再興感染症の問題が顕性化してきた。私が編集委員を担当した10年間でも、新興感染症では新型コロナウイルス感染症をはじめSFTS、エゾウイルス感染症などが相次いで国内で発生し、再興感染症ではエムポックス（サル痘）、梅毒、豚熱、アニサキス症などが増加してきたため、本誌でも取り上げていただいた。話題の感染症シリーズのコンテ

ンツを見ても、感染症は現代社会においてもいまだに重要な問題であることを痛感させられる。また、新型コロナウイルス感染症 Up-to-date シリーズでは、いち早く本症に関する正確な情報を取り上げていただいたので、私をはじめ多くの読者の方たちにとって、コロナ禍では大いに役に立ったのではないだろうか。

モダンメディア誌は医学、獣医学、One Healthに関連する諸問題に真摯に対峙し、これからも私たちに的確な情報を提供していただけるものと期待している。本誌の益々のご発展をお祈りするとともに、本誌の編集委員を10年間無事に勤め上げたことに安堵して、筆を置かせていただくことにする。